

# 初級レベルのポスター発表に向けた準備活動 —教科書で学んだ言語知識を運用力につなげるために—

堀 恵子 鈴木 秀明

## 要 旨

本稿では、予備教育における文化に関する期末発表の準備として、8回の授業で行ったインタビューとミニポスター発表の活動を報告する。活動の目標は、教科書で学んだ文法・語彙などを、ピア・ラーニングを通して運用できるようになることと、発表のための表現が使えるようになることである。授業中の様子、作成したミニポスター、期末ポスター、発表音声記録、発表後のアンケート調査から、発表面では既習項目を十分用いてコミュニケーションし、意識面では学習者は活動を前向きに捉え、達成感が高かったことが明らかになった。

【キーワード】 ミニポスター発表 口頭発表 文化 コミュニケーション

## Preparation of a Term-end Poster Presentation in an Introductory Level Course: Enhancing Communication Ability through Peer Learning

HORI Keiko, SUZUKI Hideaki

**[Abstract]** For the preparation of the term-end poster presentation in an introductory level course, we conducted eight classes focused on interviews and mini-poster presentations about the cultures of the students' countries. The aims of the activities were to communicate using the grammar, vocabulary, and expressions in the textbook, and to acquire the expressions necessary for the presentations. The analysis of the mini-posters, term-end posters, voice recordings of the presentations, and questionnaire shows that the learners could communicate using the material in the textbooks. In addition, they developed a sense of accomplishment.

**[Keywords]** Mini-poster presentation, oral presentation, culture, communication

## 1. 背景と本実践活動が目指すもの

語学教育の目的がコミュニケーション能力の涵養であることは言を俟たないが、初級の初めから教科書にある練習をなぞるだけでなく、意味ある実際のコミュニケーションをさせることは難しい。さらに、習ったことを定着させ、運用力をつけるには、どのような教室活動が有効であろうか。

コミュニケーションを成立させる第一歩は産出すること(＝アウトプット)である。アウトプットの重要性について、Swain(1985)はアウトプット仮説として、(1)言いたいことと言えることのギャップに気づかせ、(2)仮説検証の機会を与え、(3)メタ言語的/内省の参考とする機能を挙げている。しかし、強制されたアウトプット *pushed output* には長期的な効果はないとの指摘もある(Mitchell & Myles 2004)。これに対し、Long(1996)はインタラクションでの意味交渉が習得を促進するとしている。また、Swain & Lapkin(1998)は、協働対話によって問題解決をする中で、言語がコミュニケーションと同時にメタ言語として使われ、メタ言語としての利用とポストテストの得点には関連が見られたと指摘している。さらに、対話者の間に言語の能力の差があっても、どちらもが重要な貢献をしたことが観察された。

以上の研究から、練習のための会話ではなく、実際のコミュニケーション活動の中で協働対話を促すことができれば、教科書や授業で習った語彙・文法項目等を十分に活用して、運用力を伸ばせると期待できる。また、クラス内には言語能力の差は常に見られるが、能力差のある学習者間でも、協働対話に貢献し、学習者同士の学び合い(＝ピア・ラーニング)が成立すると予測される。

本稿で取り上げる集中日本語コース(以下、予備コース)では、期末課題として自国を紹介する口頭発表とポスター発表(以下、期末発表)が予定されており(後述)、学んだことを活用して興味を引き、わかりやすい発表を行うことが望まれる。そこで、本実践では、その準備活動の一環として教科書と授業で学んだ文法・語彙、会話ストラテジーを十分に運用できるようになることを目標に、ピア・ラーニングを取り入れ、毎回インタビューと自国の文化に関する小さなポスター発表(以下、「ミニポスター」)の2つの活動を行った。インタビューと応答活動は、ミニポスターの準備として発表に必要な内容を考え、言語知識を活性化させ、不足する語彙に関してピアや教師から支援を引き出す役割を果たした。

以下では、本コースの概要、本実践の8回の活動内容、学生のミニポスターと期末発表の分析、期末アンケートの結果と分析を報告し、最後に今後の課題について述べる。

## 2. 予備コースの概要と期末発表

### 2.1 予備コースの概要

筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター（CEGLOC）の予備コースは、大学院進学前の進学予備教育コースとして設置されており、春学期、秋学期ともに15週間で行われている。予備コースの授業は1日4コマ（1コマ75分）で週5日、合計20コマである。その内訳は、総合日本語演習のクラスが週15コマ、漢字クラスが週5コマである。総合日本語演習のクラスの教科書には、筑波ランゲージグループ『Situational Functional Japanese』（以下、『SFJ』）を用いている。

コース後半には、4限に日本文化および学習者の国の文化、風俗、習慣等を学ぶクラス（以下、文化クラス）が週4コマ程度設けられている。本報告では、文化クラスのうち、期末発表の準備として位置づけられる週2コマの実践について取り上げ、特に筆者2名が担当した木曜4限のミニポスター発表活動について報告する。

### 2.2 対象者

予備コースの受講者は、日本語学習歴の浅い初級前半の学生が大半を占めている。春学期は全員、本学の大学院進学を目的として来日している一方で、秋学期は大学院進学が目的の学生に加えて、各国の小学校、中学校、および高校の教育に携わっている現職教員も学生として受講している。予備コースの在籍人数は各学期10名程度であり、国籍はアジア、アフリカ、北米、南米と多岐にわたり、その大部分が非漢字圏出身で占められている。

### 2.3 自国を紹介する期末発表

予備コースでは、現在、毎学期、15週目の授業最終日に「自国を紹介する期末発表」を実施している。予備コースで一学期間に学んだ文法や語彙などの言語知識を運用して、学生自身の国の基礎的な情報や風俗、習慣などに関して、ビジターを招いて説明するという真正性の高いタスクである。

以前は、予備コースは教科書を使用した総合日本語演習クラスと漢字クラスで構成されていたが、学生の学習意欲の向上を目指して、プログラムコーディネータがカリキュラムを調整し、2013年以降、コース最終日に期末発表が行われるようになった。

期末発表は、プレゼンテーション（1コマ）とポスター発表（1コマ）の2部で構成され、コース最終日に2コマの授業時間を使って実施されている。まず、プレゼンテーションでは、学生がパワーポイントを使用して、10分程度で自国について説明する。続くポスター発表では、学生が作成したポスターを示しながら、再度自国について説明し、聴衆からの質問にも回答する。この期末発表には、学生の研究室の指導教官や先輩の大学院生、日本

人のチューター、さらには予備コースの日本語教員などを招待し、公開形式で行っている。

## 2.4 期末発表のための準備活動

毎学期、コース開始約1か月後より期末発表の準備を開始し、約10週間をかけて準備活動を進めていく。この準備活動のために、1週間に2コマの授業時間が確保されている。

次に、準備活動クラスの木曜4限、金曜4限の授業内容、発表直前の担当者による支援について述べる。

### 2.4.1 準備活動クラス(1) 木曜4限

木曜4限の授業では、次項で述べる金曜4限の授業とトピックが重複しないように留意して、主に日本文化を中心とした文化クラスを実施している。期末発表が始まった2013年に実施したトピックは、自己紹介、日本のクイズ、私の国のおもしろいもの、日本のマナー、私の好きな日本人、日本の昔話、日本のカルタの7種類であった(鈴木・四位2014)。当時は、日本の文化を学生が学び、それに付随して学生の国の紹介をするという活動があったが、2014年以降はチームティーチングをする担当教員の組み合わせに応じて、2013年当時のトピックを受け継ぎつつも、学生の国の文化の紹介を授業活動の中心に据えて、期末発表につながるような内容に徐々に変化してきた。

### 2.4.2 準備活動クラス(2) 金曜4限

金曜4限はコーディネータが担当するクラスで、初回授業の際にコース終了時の期末発表について学生に説明している。それに続いて、国の面積、人口などを扱い、大きい数字や約数、倍数などの言い方を日本語で練習する。また、国の位置、自然、気候、公用語(言語)などの基本情報も取り扱っている。さらに、宗教、歴史、料理、国の生産品や輸出入品など文化から経済まで幅広いトピックを取り上げている。

### 2.4.3 発表直前の担当者による支援

期末発表の直前には、授業内で2日ないし3日程度の準備期間が設けられている。この準備期間では、総合日本語演習クラスや漢字クラスの担当教員全員で学生の発表準備を支援している。

具体的な支援としては、学生の準備の進捗状況を見ながら、プレゼンテーションのパワーポイントおよび発表スクリプトの日本語の確認や修正、また、発表練習では、発音やイントネーションの確認と訂正などを主に行っている。そして、担当教員間で学生の進捗状況を共有し、翌日の担当教員に申し送りを行い、与えられた時間内で発表準備が終わるように連携している。

### 3. ミニポスター発表の活動

#### 3.1 活動の目標と方法

以上に述べてきた期末発表の準備の1つという位置づけの中で、木曜4限の活動では、下記の3つを主な目標とした。

(1)教科書と授業で学んだ語彙・文法、会話ストラテジーを、ピア・ラーニングを通して運用できるようにすること

(2)自国の文化を紹介するために必要な語彙・表現を身につけること

(3)ポスター発表・口頭発表と質疑応答に必要な最低限の表現が使えること

また、各目標に取り組む方法として以下の方法を取った。

①初級レベルでは、自分の言いたいことを何とか表現することはできても、相手との意味のあるやりとりを行うことは難しい<sup>1</sup>。そこで、ポスター発表でのやりとりや口頭発表の質疑応答にも対応できるよう、毎回インタビュー活動とそれに対する応答活動を設けた。

②自国の文化について小さいテーマを決め、既習の語彙・文法、会話ストラテジーを応用して表現できるよう組み合わせた。

③自国の文化を紹介するために必要な語彙・表現は、インタビュー活動の際に教師が適宜補った。また、各自スマートフォンなどで自由に調べさせた。

④発表練習はテーマに沿ったミニポスターとし、無理なく文法・表現が使えるよう空所にキーワードを補って文型が完成できるワークシート形式とし、徐々に自由度を高めて自分なりの文を産出できるようにした。

⑤ミニポスターでは、開始、終了、質疑応答の表現も毎回入れて練習した。

#### 3.2 教科書の学習項目とミニポスター発表の連携

前節の方法②で示したように文化に関するテーマと、それを表現するために必要な既習語彙・文法と会話ストラテジーを組み合わせた(表1)。

表1 各回の活動テーマ・目標項目と配布物

回	SFJ	テーマ	目標項目	ワークシート (インタビュー活動)	ワークシート (ミニポスター)
1	L8	自己紹介	目標項目：疑問詞疑問文／答える 名前、専門、国 (L1)／家族 (L7)／ 形容詞 (L6) どなた、どこ、どちら (L1)／いつ、 何人 (L3) 来る、帰る (L2)／ある (L4) となり、近くの国 (L4)	ご専門は何ですか _さんの先生はどなたですか 大学／お国はどちらですか。 お国はどこにありますか。 日本へいつ来ましたか。 ご家族は何人ですか。 夏休みに国に帰りますか。	
2	L9	言葉	目標項目：分からない言葉を書く表現 ～は、～語で、なんていうんですか。 (L5) ～は、～語で、～です。(L5)	お国はどちらですか。 (国)では、何語を話しますか。 「こんにちは」は、__語でなんていう んですか。 「～」は、__語でなんていうんですか。	わたしは、____です。 わたしの国は、__です。 わたしの国では、__語を話します。 __語で「こんにちは」は、__です。 __語で「ありがとう」は、__です。 __語で「__」は、____です。 これで発表をおわります。
3	L10	ルール	目標項目：年齢、許可表現、授受表現 ～歳 (L6) ～もいいです。(L8) だめです。(L8) ～をします。(L3) ～をあげます。(L3)	A：お国はどちらですか。 A：(国)では、○歳で、お酒を飲ん でもいいですか。B：はい、いいです。 ／いいえ、だめです。○歳からです。 A：(国)では、結婚のプレゼントに、 なにをあげますか。B：～をあげます。	わたしは、____です。 わたしの国は、__です。 わたしの国では、__さいで、__ても いいです。 わたしの国では、_____ わたしの国では、_____ これで発表をおわります。
4	L12	世界遺産	目標項目：存在文、所在文、形容詞文、 比較 ～に～があります。(L4) ～は、～にあります。(L4) て、～。(L6) は、～年にできました。(L8) は、いちばん～です。(L10)	A：[写真を見せる] B：それはなん ていうんですか。 A：～です。 B：それは、どこにあるんですか。A： ～にあります。／～と～のあいだに あります。／～のとなりにあります。 B：そこで、何をやるんですか。A： ～をします。	わたしは、____です。 わたしの国は、____です。 わたしのくにの世界遺産／有名なと ころを紹介します。 これは、____です。 これは、____です。 __は、_____ これで発表をおわります。
5	L12	有名人	目標項目：意味を書く表現 ～って、なんですか。～っていうの は、～のことです。(L5) ～というのは、～のことです。(L5)	B：その人はだれですか。A：この人 は～さんです。 B：その人はなにをしますか。A：～ をします。 B：しごと job はなんですか。A：～ です。 B：その人はどんな人ですか。A：～ さんは、～て、～です	わたしは、____です。 わたしの国は、____です。 わたしの国の有名な人を紹介します。 この人は、__さんです。 _____[2行] この人は、__さんです_____ _____[2行] これで発表をおわります。
6	L13	国旗	目標項目：色／形、意味を書く表現 色、形 (L10) ～って、なんですか。～っていうの は、～のことです。(L5) ～というのは、～のことです。(L5)	A：国旗 [写真を見せる] B：国旗は何色ですか。A：赤と、白と、 ～です。 B：どんな意味ですか。A：赤は、～ です。 B：いつできましたか。A：1940年 です。	わたしは、____です。 わたしの国は、____です。 __の国旗を紹介します。 国旗の色は、__と__です。 __色の意味は、__です。 _____ 国旗は__年にできました。 これで発表をおわります。
7	L14	クイズ面白物	目標項目：疑問文、知っていること を出題する表現 ～でしょうか。	どこで使いますか。 だれが使いますか。 日本人は、みんな持っていますか。 それは、〇〇ですか。	こんにちは。 ほりです。 わたしの国は、日本です。 これは、わたしの国のものです。 これはなんですか。 ×これはなんですか
8	L16	スポーツ	目標項目：名詞修飾、比較、意味を 書く表現 名詞修飾 (～が一番人気がある N) (L13) 上手 (L13) ～って、なんですか。～っていうの は、～のことです。(L5) ～というのは、～のことです。(L5)	B：Aさんの国で、いちばん人気があ るスポーツはなんですか。A：[写真 を見せる] __です。 B：Aさんも (スポーツ) をしますか。 A：はい、よくします。／いいえ、見 るだけです。 B：いちばん有名な選手はだれですか。 A：__です。	わたしは、____です。 わたしの国は、__です。 わたしの国で、いちばん人気がある スポーツは、__です。 _____[2行] わたしの国で、いちばん有名な選手 は、____です。 _____[2行] これで発表をおわります。



### 3.3 授業の様子

木曜4限は、毎回、導入（5分）、ペアでのインタビュー活動（30分）、ミニポスター作成（10分）、ミニポスター発表（30分）の4つの活動（合計75分）で構成されている。以下では、各活動について順に説明する。

まず、授業の冒頭で、2名の教師がその日の学習内容（トピック）を紹介する。その後、教師が日本の例を題材とした活動モデルを口頭およびパワーポイント（図1）で提示し、学習者に活動内容を理解させる。

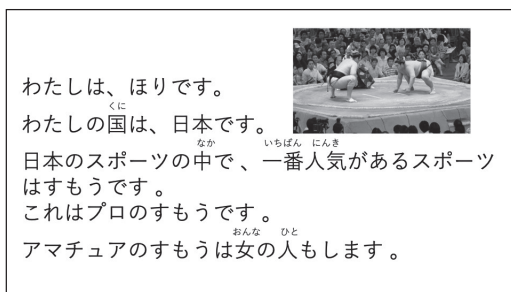


図1 トピック紹介のスライド例

次に、表1で示したワークシートを配布して、その日の活動で使用する既習文型を確認してから、ペアでのインタビュー活動を行う。ここでは、学習者同士で、各自が選んだトピックに関連する写真（印刷されたもの）や実物を使用して、お互いに日本語で質問し合う。また、聞き取った回答はワークシートに記入する（図2）。そして、学内の学習管理システム Learning Management System（LMS）を通じて学習者が提出した写真を、教師が印刷して用意する。

ペアでのインタビュー活動は、1ペアにつき10分程度で行い、時間が来たらペアを交代して、新しい組み合わせでインタビューを再度行う。このペアでのインタビュー活動を2回ないし3回行う。

きょうのテーマ 国の人気があるスポーツ SFJ Notes vol.2 p.140 L.13

① 国の人気があるスポーツについて聞く  
Bさん: 質問する  
Bさん: Aさんの国で、いちばん人気があるスポーツはなんですか。Aさん: (写真を見せる)——です。  
Bさん: Aさんも(スポーツ)をしますか。Aさん: はい、よします。/ いいえ、見るだけです。  
Bさん: いちばん有名なせんしゆはだれですか。Aさん: ——です。

[むずかしいことばを聞く]  
Bさん: ~って、なんですか。Aさん: ~っていうのは、~のことです。  
インタビューメモ

なまえ	くに	スポーツ	せんしゆ(player)	する/見る

図2 インタビュー活動のためのワークシート例

さらに、ワークシートの空欄部分に必要な事項を記入して、ミニポスターを作成する。ワークシートにはペアでのインタビュー活動の際に学生が話した自国の文化に関する情報を日本語で記入し、テーマを表す印刷済みの写真とつなぎ合わせて、ミニポスターを完成させる(図3)。

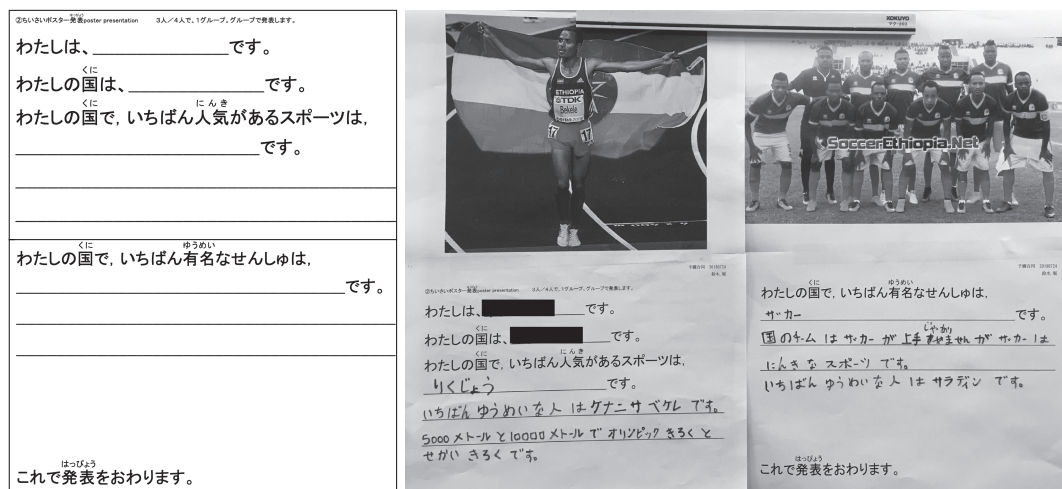


図3 ミニポスターのワークシートと実際のミニポスター例

最後に、本授業のまとめの活動として、グループでのポスター発表を実施する。3つのグループに分けて、教室内の3か所のホワイトボードと黒板にミニポスターを貼付し、グループ内での発表と質疑応答の活動を行う。1グループは3名から4名で構成され、グループ内で一人ずつ順番に発表し、発表者以外の学生からの質問を受け、それに対して回答する。このグループ内でのミニポスター発表は、トピックによっても所用時間が異なるが、時間を調整しながら学生の組み合わせを変えて2回ないし3回行う。

### 3.4 実施上の注意点

本実践においては、学生がトピックに集中し、既習文型を駆使しつつ自身の言いたいことが言えるように、教師はファシリテーターとしての役割を意識しながら授業運営に当たった。

授業内では、学生に媒介語の使用は許可したが、可能な限り簡単な日本語でコミュニケーションを取るように指示した。しかし、既習文型は日本語で使えるが、トピックごとに出てくる語彙は、学生にとって未習の語彙も少なくない。そこで、2名の教員は学生が使用したい語彙に関しては、ホワイトボードに板書し、クラス全員で語彙や日本語表現を共有した。また、ペアでのインタビュー活動やミニポスター発表を行う際には、



文化、風俗、習慣などが異なるように、学生の組み合わせにも配慮して、グループを編成した。

## 4. ミニポスターと期末発表分析

### 4.1 ミニポスター

本章では、2019年度春学期の受講生（9名）のミニポスターと期末発表について、コースの3つの目標（3.1）が達成できたかを分析する。

本節ではミニポスターにおいて、(1)既習の語彙・文法と会話ストラテジーを学生がどのように使用できたか、(2)自分に必要な語彙・表現を利用できたか、(3)発表に必要な表現を使用できたかを、例を挙げながら見ていく。

ミニポスターのワークシートは、表1の最右列に示すように、最初のポスターである「国の言葉」では空所に入れるのは語レベルであったが、徐々に句から文単位へと増やし、自由度が高くなるようにした。そのため、既習の語彙・文法を使用して、徐々に長い文が産出されていった。

わたしは、\_\_\_\_\_です。  
 わたしのくには、\_\_\_\_\_です。  
 わたしのくには、18 さいで、お酒をのん \_\_\_\_\_ てもいいです。  
 わたしのくには、女の人は18さいでけっこうでもいいですが、  
わたしのくには、男の人は21さいでけっこうでもいいです。  
 これで発表をおわります。

図4 「国のルール」のミニポスター例

2回目の「国のルール」では、2つのルールについて書けるように空所を設けていたが、図4に挙げた学生の場合、男女の対比について述べるため、接続助詞「が」を用いて、1文になるように工夫している。なお、図中、ゴシックは配付したワークシートに印刷されていた文字で、学生が記入した文字を明朝体で記入している。国名、人名は伏している。

3回目の「国の世界遺産」では、さらに自由度が高くなり、図5の例では1つの世界遺産を3文で表現している。3文の順序は結束性のある文章を形成しており、単に文の羅列にとどまらない。

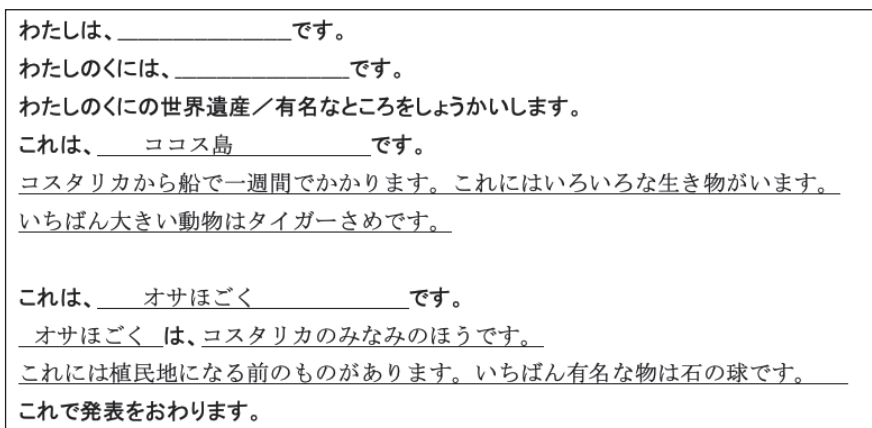


図5 「国の世界遺産」のミニポスター例

6回目は、『SFJ』でデパートでの買い物場面を扱っているため、そこで習った色や形の語彙を利用できるよう「国旗」をテーマにしている。ミニポスターでは国旗の色が示す意味を説明させるが、そのために必要な語彙は初級レベルを越えた抽象的なものが多い。そこで前述のように、インタビュー活動の中で学生の求めに応じて教師が語の難しさに考慮しながら語を示し、クラスで共有した。図6のミニポスターでは、そのような語を取り入れている。

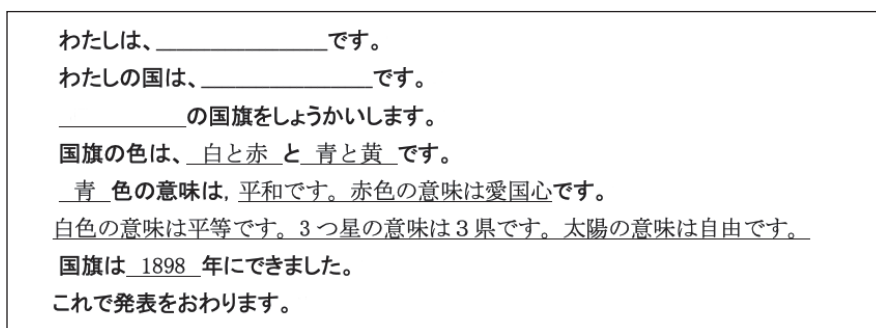


図6 「国旗」のミニポスター例

なお、学生は自分が表現したい語を教師に尋ねる際に、『SFJ』5課で学んだ「(英語)は、日本語でなんて言うんですか」を使って尋ねることが頻繁に見られた。初めはその表現が使えなかった学生も、回を重ねるごとに使えるようになっていった。

また、グループでのミニポスター発表では、ワークシートの末尾に「これで発表をおわります」という表現を付けたことで、発表の終わりの表現を繰り返し使用し、習得することができた。さらに、その後続けて、「質問をお願いします」などを用いて質疑応答

に入っていた。聞き手は、「～って、なんですか」「(日本語)って、英語でなんて言うんですか」など会話ストラテジーとして学んだ表現を用いていた。その際、日本語で表現できない学習者に教える場面がしばしば見られ、ピア・ラーニングによる学び合いが実現されていた。

以上、ミニポスターにおいてコースの3つの目標がピア・ラーニングによって達成されていたことを示した。

#### 4.2 期末発表

期末発表のポスターには、各自が5から9のテーマを選んだ(表2)。全員が選んだ国土・地理・人口など国の基本情報と料理に加えて、ミニポスターで扱ったスポーツ、世界遺産、国旗、有名な人などが取り上げられており、本実践のテーマはおおよそ学習者が発表したいことと一致していたと言えよう。

表2 期末ポスター発表で取り上げられたテーマ数(8名分<sup>2</sup>)

テーマ	取り上げた学生数
国土・地理・人口	8
食べ物	8
スポーツ	7
世界遺産	6
国旗	5
有名な人	5
有名なところ	5
文化	5
歴史	4
祭り	3
経済	2
都市	2
その他	12



図7 期末発表ポスター例

図7は、実際の学生のポスターである。選んだテーマについて、ミニポスターで使用した写真を使ったり、新たに加えたり、見栄えがよくなるように加工したりして、自由にレイアウトを考えていた。

学生によって取り上げた話題が異なるため、学習目標である文法項目、表現を発表において使用できたかどうかを評価することは難しいが、本実践では、ポスター発表の際にボイスレコーダーを携帯させ、発表内容と質疑応答を録音した。録音は、操作の不備によって録音できなかった1名を除いて8名が行い、合計265.5分の録音が得られた。一人あたり平均33.2分で、およそ2回分の発表が録音された。その中で学生が使用した項目の一覧を載せる(表3)。

ポスター発表は、1回の発表がおおよそ15分程度で、数名を前に質疑応答を交えて行われる。15分程度経過したところで教師が合図を出し、聞き手が交代する。そのため、発表者は3回程度同じ話を繰り返すことになる。録音によると、聞き手によって、発表者が話すのを聞いてから質問をするタイプと、ポスターについて次々に質問をし、発表者はそれに答えながら用意した発表を行うタイプとが見られた。質問によっては予想外の事柄が話題になることもあり、録音に現れた文、表現もそのことによる偶然性が影響した可能性が考えられる。

表3 期末発表で使用された目標項目と表現などの出現回数（8名分<sup>3</sup>）

回	目標文法項目, 表現	出現回数
1	名前, 専門, 国 (L1) / 家族 (L7) / 形容詞 (L6)	8
	どなた, どこ, どちら (L1) / いつ, 何人 (L3)	1
	来る, 帰る (L2) / ある (L4)	6
	となり, 近くの国 (L4)	4
2	～は, ～語で, なんていうんですか。(L5)	0
	～は, ～語で, ～です。(L5)	0
3	～歳 (L6)	2
	てもいいです。(L8)	2
	だめです。(L8)	1
	～をします。(L3)	6
	～をあげます。(L3)	1
4	～に～があります。(L4)	6
	～は, にあります。(L4)	4
	て, ～。(L6)	4
	は, ～年にできました。(L8)	0
	は, いちばん～です。(L10)	3
5	～って, なんですか。～っていうのは, ～のことです。(L5)	(2)
	～というのは, ～のことです。(L5)	0
6	色, 形 (L10)	5
7	～でしょうか。	0
8	名詞修飾 (「で一番人気がある N」など) (L13)	7
	上手 (L13), ～は～が～	4
上記以外の文法項目, 表現		
	のとき / Vるとき	5
	たら	3
	～が, ～	2
	になる	2
	可能表現	2
	～という N	2
	人気がある	2
	と思う	2
	～から～まで (時間) かかる	2
	Vるまえ	1
	あとで	1
	なんでもいい	1
	ですけど (接続詞)	1
	ている (結果状態)	1
	ので	1
	～たり, ～たり, する	1
	これは, ～の 1/7 です。	1
	Vかた	1
	Vるみたい	1

表3の文法項目と表現の一覧を見ると、目標項目の文法、表現はほぼ使用されていることが分かる。2回と7回では目標項目が質問文であったため、発表には表れにくく、使用が見られないのはそのためと考えられる。また、5回の「～ってというのは、～のことです。」は、後半の「のこと」が使用されず、「～ってというのは、～です。」の形で使用されていた。形式名詞の「こと」の使用はかなり難しいと言えよう。一方で、8回で扱った名詞修飾（「私の国で一番人気があるスポーツは～」）は、提示した表現にとどまらず、より一般的な文の中でも使用が見られ、8名中7名が使用し、かなりよく習得されていると言える。さらに、ポスター発表で目標とした文法、表現だけでなく、教科書、授業の中で習った文型、表現を数多く用いていることが明らかになった。

もちろん、これらが習得できているのは、本実践による成果だけではなく、使用した教科書、コースを通じての授業の進め方、他の文化を扱った授業などの要因が重なって生まれたものであることは、言うまでもない。しかし、次節で見ると、ポスター発表では同じ表現を繰り返し使用することが、強制によってではなく、自然に行われるため、実際の使用の中で習得が促進される効果があったと言えよう。

### 4.3 期末発表の繰り返しの効果

本節では、発表を繰り返すことで流暢さが増した例を紹介する。この発表では、1回目は聞き手である教師が次々に質問し、話題を主導して進んでいる。国の食べ物の話題が続いた後で、どのように食べるかを質問した。（Sは発表者である学生、Tは聞き手の教師の発言であることを表す。また、聞き手の相づちを<>に入れて示す。=に続く部分は、前の話者との同時発話である）

#### 【1回目の発表】

（国の食べ物の話題が続いた後）

T1: 手で、手で食べます？

S1: はい

T2: 手で？

S2: はい。(国名)に、あー、

T3: で。

S3: (国名)で、あー、床に<うん>床？

T4: あ、床に？

S4: はい

T5: あ、座って。

S5: はい、はい、はい。床に座って食べます。



T6: =で、食べますね。えー。

S6: 床で、床で、ふとん？ふとん、ふとん。

T7: ふとんじゃない、布、布。

[中略：敷物、座り方の話題]

S7: (国名)人は、あ、床、床に寝ます。

T8: 寝ます。あ、日本と同じ？

1回目の発表では、T 1の質問、T 3の誤用訂正、T 5の動詞の提示を受けて、S 5で「床に座って食べます。」と産出している。それが、2回目の発表では、聞き手の援助がなくとも、自ら完全な文を発話している（波線部分）。

#### 【2回目の発表】

(国の食べ物の話題の後で)

(国名)人は、座って食べます。座って、手で食べます。でも、あー、寝る時、あー、寝るとき、床に寝ます。

このように、ポスター発表によって練習のための発話ではなく、実質的なコミュニケーション活動の中で繰り返し用いることによって運用力が付けられると言える。

## 5. アンケート調査

本実践では学生に対し、授業の感想と学んだことなどについてアンケート調査を行った。そこで、学生自身がどのように活動を捉えているか報告する。

### 5.1 調査の概要と調査項目

調査は、最終日の発表が終わった後に、クラスで記入する形式で行った。学生には予め調査協力を呼びかけ、調査が強制ではないことを理解させた。

調査項目は、取り上げたトピックに対する評価、このコースで学んだこと、授業の印象を聞くために、次の5項目とし、各項目の下位質問について、5件法で答えさせた。使用言語は英語とした。

- ①各トピックはおもしろかったか
- ②各トピックは発表の役に立ったか
- ③授業で何を学んだか
- ④授業の印象
- ⑤その他自由記述

## 5.2 調査結果と考察

回答は9名から得られた。集計では、「強くそう思わない STRONGLY DISAGREE」を1、「強くそう思う STRONGLY AGREE」を5とした。クラス人数が9名と小さいことから、記述統計的な分析のみを行う。

### 5.2.1 取り上げたトピックについて

調査項目の、①取り上げたトピックはおもしろかったか、②発表の役に立ったかの2点に関して、回答の平均値を図8に示す。

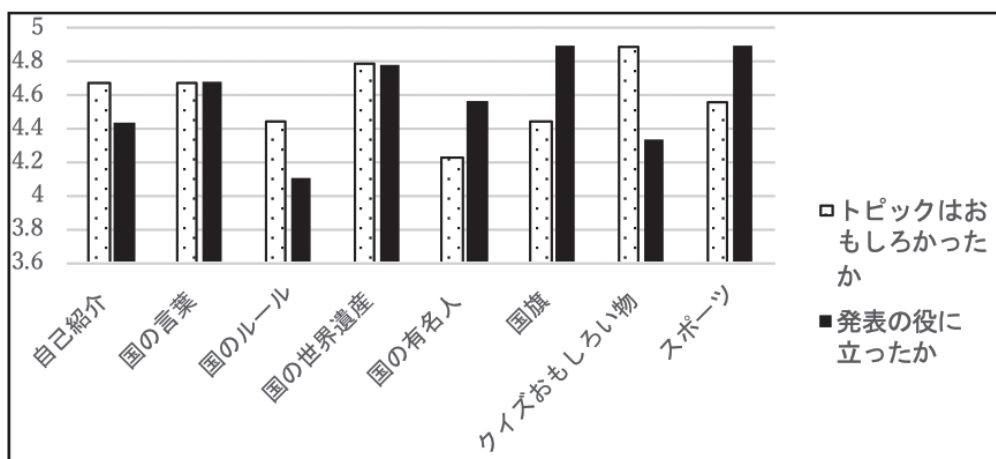


図8 各トピックはおもしろかったか／発表の役に立ったか

その結果、どの項目も平均値が4.1ポイント以上と、「そう思う」を越える評価であり、おおむねトピックはおもしろく、役に立ったと評価されていることがわかる。その中で、「国の有名人」はおもしろさではやや評価が低めであるが、実際の発表においては5名の学生が取り上げていたこともあり、4.56ポイントと役に立ったと答えている。

また、「クイズ国のおもしろい物」については、トピックとしてはおもしろいが(4.89ポイント)、ポスター発表の中では用いないためか役に立ったかについては4.33ポイントとやや低めであった。「国のルール」については期末ポスターで取り上げた学生がおらず、そのため役に立ったかの評価が低くなったものと思われる。

### 5.2.2 授業について

次に、③授業で何を学んだか、④授業の印象と、自由記述についてまとめる。表4は③と④の各項目の回答の平均と標準偏差を表す。

まず、コースの目標について結果を考察する。③授業で学んだことについては、どの

項目も 4.3 ポイント以上で、特にこのコースの目標としていた(1)教科書と授業で学んだ語彙・文法、会話ストラテジーを運用できるようにすることに関して、③-問い6では4.63ポイントと、学べたと回答している。また、目標の(2)自国の文化を紹介するために必要な語彙・表現を身につけることに関しては、③-問い2の「発表の内容」が4.44ポイントと高いことから、これも学べたと評価していることが分かる。

表4 授業で学んだこと／授業の印象

③授業で何を学んだか	平均	標準偏差
問い1 質問のしかた	4.33	0.71
問い2 発表の内容	4.44	0.53
問い3 発表する時に使うことば	4.56	0.53
問い4 発表の始めと終わりの言葉	4.67	0.50
問い5 日本語で発表するときのスタイル	4.56	0.53
問い6『SFJ』で習った日本語を本当に使う話し方	4.63	0.74
④授業の印象	平均	標準偏差
問い1 授業はたのしかったですか	4.78	0.44
問い2 授業はむずかしかったですか	2.56	1.13
問い3 授業はおもしろくなかった	1.33	0.50
問い4 授業のやり方はよかったですか	4.44	0.53
問い5 必要な知識が得られましたか	4.78	0.44
問い6 話す力を伸ばせましたか	4.67	0.50
問い7 聞く力を伸ばせましたか	4.44	0.53

最後にコース目標の(3)ポスター発表・口頭発表と質疑応答に必要な最低限の表現が使えることについては、③-問い1、問い3、問い4、問い5のポイントがいずれも4.33ポイント以上と高いことから、高評価であることが分かる。

以上、コース目標との関連から見ると、3つの目標に対する自己評価はいずれも高く、授業で学ぶことができたと考えていることが明らかになった。

次に、④授業の印象の問いからは、難易度や満足感を調査することを意図した。④-問い3「おもしろくなかった」は回答行動を確認するための反転項目として出題した。結果は、1.33ポイントで、反転させて「おもしろかった」3.67ポイントと考えられ、④-問い1「たのしかった」が4.78ポイントであることと矛盾しないことが確認された。回答者は問題をよく読んで、注意深く答えたと言える。

その結果、おおむね授業は楽しく、学生は授業のやり方を支持し、彼ら自身の必要な知識を伸ばし、話す力と聞く力を伸ばすことができたと考えていることが明らかになった。達成感を得られたと言える。

一方、④-問い2「むずかしかった」については、2.56ポイントと、難しくなかったと考える学生の方が多く、回答は最低1から最高5までに分布し、標準偏差が1.13と

大きい。しかし、5ポイントを選んだ回答者は、同時に④-問い1「たのしかった」は5、④-問い3「おもしろくなかった」は1をマークし、自由記述欄では、「とても難しいが、役に立った。日本語の勉強を続けたい。このグループを選んでよかった（原文英語、筆者訳）」と述べており、授業を難しいと評価したことは、この実践が挑戦的な活動であったと前向きに捉えているのではないかと推測される。

最後に、自由記述欄では、「本実践が期末発表に役に立った／とてもよかった／教師のクラス・コントロールは完璧だった」といった記述が見られ、おおむね本実践が高評価されたと言える。

### 5.3 調査のまとめ

以上、アンケート調査結果から、本コースの3つの目標に関して学生は達成できたと考えていること、授業の印象と自身の満足感、達成感についてもおおむね高評価していることが明らかになった。

一方、本調査では目標の1つとしていたピア・ラーニングを通して学ぶことについては質問していない。そこで、今後の課題として、学生のピア・ラーニングに対する意識を調査し、よりよい学び合いの方向性を探していきたい。

## 6. まとめと今後の課題

本稿では、予備コースにおける自国を紹介する期末発表の準備活動の1つとして、インタビュー活動とミニポスターを行った8回の実践について、コースの目標、授業の進め方について述べ、学生の作成したポスターと発表音声記録、発表後のアンケート調査を通してその効果と学生の意識について考察した。

活動の目標は、下記の3点であった。

- (1)教科書と授業で学んだ語彙・文法、会話ストラテジーを、ピア・ラーニングを通して運用できるようにすること
- (2)自国の文化を紹介するために必要な語彙・表現を身につけること
- (3)ポスター発表・口頭発表と質疑応答に必要な最低限の表現が使えること

その結果、目標はおおむね達成され、学生の満足度も高いことが示された。

本実践は予備コースの中の『SFJ』という特定の教科書を使ったコースであるが、他のコース、他の教科書であっても同様に実施可能であることを述べたい。既習の文法、語彙と学習者に行わせたいコミュニケーション活動をうまく組み合わせ、不足する語彙、表現を補えば、本実践のように学習者の達成感を得られる活動にすることは可能であろう。その際、ピア・ラーニングを通して不足する語彙・表現を補い合ったり、コミュニケーションを助け合ったりすることが、活動を楽しくし、学習を促進することになるであろう。

さらに、『SFJ』には豊富な会話ストラテジー（知らない語を聞く表現、相づち、フィラー、繰り返し、言いさし等）が盛り込まれていることが、本実践の遂行に大いに寄与していることを強調したい。これらの会話ストラテジーは、他の文法シラバスに基づいた教科書を用いている教育機関では、別途補うことが必要となろう。教師にとっては負担が増すと感じられるかもしれないが、授業の外での学習者の実際のコミュニケーションに寄与することを考えれば、言語教育に必須であると言えよう。

最後に今後の課題として、2点を挙げる。

第一に、今回ピア・ラーニングの効果を検証することはできていないため、意識を調査する、授業中の会話記録を分析する、などが今後必要であろう。

第二に、本実践で扱った文化に関するテーマのうち、期末発表に取り入れられなかったものもある。そこで、今後はテーマを学生自身に選ばせ、学生自身が話したいことを表現できる真のコミュニケーション活動に近づけることが必要であろう。

## 注

1. たとえば、ACTFL 言語運用能力ガイドライン 2012 年版—スピーキングでは、知っていることを組み合わせて自分なりの意味のある文（疑問文）を産出できるのは中級—下のレベル以上であるとしている。
2. ポスターを写真で記録できたのが8名であったため、表2は8名分である。
3. 録音操作の不備によって1名分は録音できなかったため、表3は8名分である。

## 謝辞

本稿執筆にあたり、予備コースに長らく関わってこられた酒井たか子元教授、関崎博紀准教授の協力を得た。また、コースに参加した学生の協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。

## 参考文献

鈴木秀明・ヨフコバ四位エレオノラ（2014）「習熟度の異なる学習者に対する授業の可能性と課題 - 初級日本文化クラスの実践を通して -」筑波大学留学生センター日本語教育論集第29号：93-104.

筑波ランゲージグループ(1991)『Situational Functional Japanese』Vol.1, 2 凡人社  
ACTFL「言語運用能力ガイドライン 2012 年版—スピーキング」< <https://www.actfl.org/publications/guidelines-and-manuals/actfl-proficiency-guidelines-2012/japanese/> スピーキング>, 2019年9月16日閲覧

Long, M. H. (1996) “The role of the linguistic environment in second language

acquisition”, in W. C. Ritchie, & T. K. Bhatia (eds.) *Handbook of second language acquisition*, New York: Academic Press: 413-468.

Mitchell, R. & Myles, F. (2004) *Second language learning theories (2nd ed.)*, London: Arnold.

Swain, M. (1985) “Communicative competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development”, In S. Gass & C. Madden (Eds.), *Input in second language acquisition*, Rowley, MA: Newbury House: 235-253.

Swain, M., & Lapkin, S. (1998) “Interaction and second language learning: Two adolescent French immersion students working together”, *The Modern Language Journal*: 82(3), 320-337.